



【6】二葉館(川上貞奴邸)…木曽川発電のロマン

1 桃介と貞奴

福沢桃介、松永安佐工門といえば、日本の電力業を牽引した人物として知られます。また川上貞奴は、あのピカソやロダンなどをファンとした、日本最初の女優といわれる女性です。そのような人たちが住んだ家が、名古屋の東区にありました。大正時代、その屋敷は東二葉町にあったためか、「二葉御殿」と呼ばれ、連日、名古屋の財界人が集まっていたといいます(図1)。



図1 建設されたところの二葉御殿(文献③)

なぜ、そのような人たちがそこに住むようになったのでしょうか。そのキーワードは「木曽川の水力発電」です。そこに事業を賭けた

福沢桃介を中心にした物語がありました。今回は、白壁地区に展開したもう一つの物語を追ってみたいと思います。

2 川上貞奴邸

(1) 桃介と貞奴

明治時代の終わり、日本の電気需要は電灯から電力へと変わろうとしていました。その頃、虚業である株を離れ、実業の世界に生きようとしていたのが、福沢諭吉の娘婿になった福沢桃介です。

氏と名古屋の電気業界との係わりは明治41年、名古屋電灯の経営問題が起こった時、検査役の、三井銀行名古屋支店長、矢田績からの依頼でした。そこで、株を取得して地位を上げ、常務取締役役に就任しました。そしてライバル、名古屋電力との合併を成し遂げたのです。しかし経営の強引さが地元財界に反感を持たれたようで、常務を辞任して、水力発電の適地を求め、木曽の山中を歩いていました。

ところが大正2年、経営不振で再び迎えら

図2 福沢桃介が建設に係わった木曽川の水力発電所

完成年	名称	出力 kW	方式	事業会社
明治45	八百津	10,000	水路	木曽電気興業
大正8	賤母	12,600	水路	木曽電気興業
10	大桑	11,000	水路	大同電力
11	須原	9,200	水路	大同電力
12	桃山	23,100	水路	大同電力
12	読書	40,700	水路	大同電力
13	大井	42,900	ダム	大同電力
15	落合	14,700	水路	大同電力

ウィキペディア「福澤桃介」等より作成

れ、翌3年には社長に就任することになったのです。氏は、木曽川開発を可能にするため森林鉄道を敷設し、発電所の建設に着手しました。また余剰電力対策として、電気製鉄事業を起こすとともに、関係の会社を合併統合しつつ、9年、大同電力等の会社を興し、次々に木曽川に発電所をつくっていきました（図2）。12年には、大阪への送電線も完成させたのです。

一方川上貞奴は、大正6年に主人川上音二郎の7回忌を終え、初恋の人であった桃介の拠点、名古屋にやってきました。貞奴と桃介は相談して、東区の高台、白壁地区のやや北に土地を見つけ、大きな邸宅を建てたのです。その建物は桃介の財界活動の拠点となり、「二葉御殿」と呼ばれることになりました。

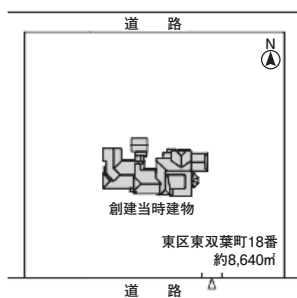
そこには、一時、桃介から名古屋の電気事業の助っ人と呼ばれた、後輩の松永安左工門も、夫婦で離れに住むことになりました。

しかし15年には、桃介は事業の全国展開に伴って東京に移りました。貞奴も追うように、東京に移っていったのです。

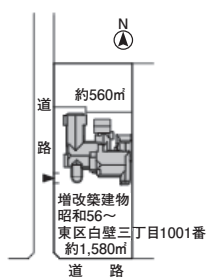
(2)川上貞奴邸(二葉館)

二葉御殿は、名義は貞奴で、川上貞奴邸とされます。建築されたのは大正9年。白壁地区の少し北に2,600坪の土地を確保しました。この辺りは、名古屋台地の北の高台で、江戸時代は家老の屋敷でした。そのため大きな区画が入ったのでしょう。

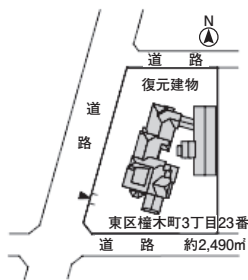
建物は和洋折衷で、主体は洋館ですが、後ろに貞奴のために和室が設けられています。設計・施工は、当時、軽井沢などで洋風住宅を専門に建設していた「あめりか屋」で



大正9年頃～昭和12年



昭和13年頃～平成11年



平成17年～

図3 川上貞奴邸の変遷。

①建設時、②改修時、③移築時 となる(文献③)

す。桃介がこの会社の建物を気に入って指名しました。噴水やサーチライトなど、電気の最新の技術が取り入れられたほか、ステンドグラスが多用されています。作者は日本のグラフィックデザインの礎を築いた一人とされる杉浦非水で、桃介の義理の弟にあたります。

(3)保存の経緯

主人公の消えた貞奴邸は、東側の洋館の部分が除却され、西側の和館を中心にした部分が、昭和12年、大同製鋼役員の川崎舎恒三に引き継がれました(図3)。そして氏が亡く

なると、大同製鋼の厚生施設になったのです。ところが平成7年の神戸大震災で同社の社員寮が被災したため、この建物の耐震性もチェックされました。その結果、危険と診断されて、使用中止。除却が決定されたのです。

その情報を得た名古屋市は、何とか保存できないか交渉に入りました。しかし、同社には、同地での保存の意思はありませんでした。そこで市は、とにかく保存するために、建物の調査をし、解体して保管する場所を確保しました。そのうちに、白壁地区のはずれに土地確保の目的が立ったのです。そこで、平成12年、大同製鋼から建物の寄付を受けて、解体保存のうえ、再建されることになりました。

再建方法をめぐっては、学者や専門家の意見を聞き、特徴的な外観や大広間を再現するため、創建当時の姿での再建を試みることになりました。設計図はなく、写真も数枚という厳しい条件でしたが、幸い、居住経験のある方がおられたのです。そこで、様々な情報を収集、総合して再建の設計図ができました(図4)。再建に当たっては、文化財指定も視野に、極力解体資材を活かすなど細かな配慮がなされています。

そして17年。二葉の日の2月8日に、開館にこぎつけました。翌日には一部が国の文化財に登録されたのです。

3 紀行 御殿跡から二葉館

… 移転と復元 …

まず、当初川上貞奴邸の建てられていた場所を見てから、移転・復元された川上貞奴邸(二葉館)を訪ねてみましょう。

〈御殿跡〉

基幹バス新出来町線の清水口停で下車、

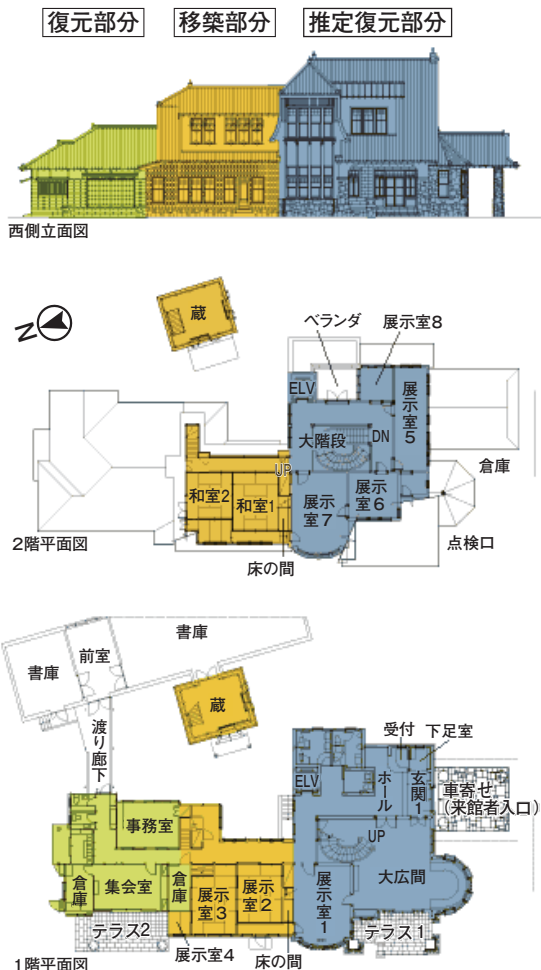


図4 移築。復元された「二葉館」。
大きく3部分に分かれる(文献③)



二葉御殿は、北から見ると台地の上にそびえていた



御殿のあった所は大きなマンションと個人住宅に変わっている

北に坂を下ります。3本目を右に曲がり台地の下の道を進むと、右に、勾配が急なため階段になっている道路があります。その階段を上った辺りが、二葉御殿と呼ばれた川上貞奴邸でした。

階段を上ります。跡地に建った大きなマンションの横を通り、1本目の角に出ます。この左側、マンションの敷地内に、「旧川上貞奴邸跡」と書かれた碑が建てられました。御殿は、台地の上の一街区すべてと西側も含む区域でした。東に1本行き、敷地全体を眺めてみましょう。当初の建物は、門が東に向けて建てられていました。

〈二葉館〉

二葉御殿の1本南の幹線道路(新出来町線)を東に進みます。金城学園を通り越した広い道を曲がり南に進みます。しばらく行くと左側に、朱色の瓦の洋館が見えてきます。それ



移築され、創建当時に復元された川上貞奴邸の二葉館(側面)



二葉館の正面。印象的な、複雑に組み合わせられたオレンジ色の屋根

が、復元された二葉御殿、公開施設になった「二葉館」です。敷地の大きさの関係で、元は東側が玄関でしたが、南側に回転して復元されています。

玄関に行き、厚いドアを開けて中に入ります。入ると、左手は大広間です。窓いっぱい大きなステンドグラスが目を引きます。右手前には2階からの階段が曲線で広間に降り



大広間。2階からの階段が客を迎えるように降りてきている



大広間のステンドグラス。
このほか各所に見られる

てきています。この部屋で、桃介、貞奴を中心にした演劇会が行われていたのでしょうか。この区画は除却されていたため復元新築です。

右手奥に行くと和室があります。貞奴のくつろぎの場所だったといわれ、それらしい家具も見られます。



貞奴の居間。原形が残っている

2階は、名古屋文学の展示施設になっています。中心は、名古屋の城山出身の「城山三郎」で、その書斎の一部が復元されています。他の部屋には、名古屋出身の文学者の展示室や貸展示室もあります。中央にある曲線の階段を降りると、自分がスターになったような気分になりました。

館を出ると道路に、観光施設を巡回する「メーグル」というバスの乗り場があり、栄や



2階の文学館に復元された「城山三郎」の作業場
名古屋駅に行けます。

4 よみがえった二葉御殿

川上貞奴邸は、保存に当たって「移転復元」という道を選択することになりました。元の位置は土地が細かく細分され、復元は無理になっていたのです。

この建物の価値は、突き詰めれば、御殿と呼ばれた外見と桃介・貞奴の口マンといえるでしょう。その意味では、現地で変形された状態での保存よりも、位置は動きましたが創建当初の姿、貞奴と桃介が造り、住んだころの姿で復元できたことは、よい選択だったと考えられます。彼らは新築の家に住んだのです。

少ない資料から、完成形を作り上げるまでには多くの困難があったと思います。しかし出来上がってみると、今にも、玄関から桃介と貞奴の二人が手を取り合って出てくる姿が目に見えそうです。今後は、さらなる内部の充実と維持・管理が課題になりました。

〈主な参考文献〉

- ①城山三郎『創意に生きる－中京財界史』
(1994、文春文庫)
- ②西尾典祐『小説 二葉御殿』(2006、樹林舎)
- ③「文化のみち二葉館」ホームページ